

絶対的なものとしてでなく、あくまでとるべき多くの保育方法、手段の中の一つとならば、或る程度の価値をもつ試みと言えるものではないかと思う。はじめ私は、器質生成期の方がより不安定な時期であると考えていたが、実際には器質生成期はその前の機能完成期をうけて却つて子供に落着きのみえる時期であり、機能発達期こそ保育者が慎重を期さねばならない時期であること、機能発達期である六カ月——一ケ年、二ケ年前後、二ケ年六カ月——二ケ年八、九カ月、四ケ年——五ケ年の間は子供の心身の状態が非常に不安定であることを知り得るように思う。それは一面、器質生成期は或る程

度はつきり目に見えるので、自然に保育者の注意が行届くし、保育方法は集団保育では多少とも機械的な反復的になり易いから、丁度とり扱いと発達状態がマツチするが、機能発達期の場合はその逆になり易い事情も考えられる。乳幼児期に於ては、発達過程のあり方に必ずしも一律に論ぜられないことは、十分に理解しなければならぬことである。強いてこのことにこだわる必要もないと思うけれども、私としては、今後もお追求しつゞけるに足る問題だと考えられるのである。

幼稚園の道德教育

東京学芸大学

稻毛卓

(原稿不提出)